

藤澤武史(関西学院大学商学部教授)

多国籍企業の

市場参入方式選択理論に関する検討

ー取引コスト理論, プリンシパル・エージェンシー理論,
ダイナミック・ケイパビリティ論からの接近ー

商学論究(関西学院大学) Vol.64 No.4
pp.177~199 2017.3.

本論文は、多国籍企業の外国市場参入戦略に関する一般理論を構築するため、市場参入方式としての国際戦略提携、特に海外フランチャイジング(FC)と国際M&Aに着目し、それらを説明する理論として、取引コスト(TC)理論、プリンシパル・エージェンシー(PA)理論、ダイナミック・ケイパビリティ(DC)論を取り上げ、これらの理論の有効性及統合可能性について検討している。

本論文の構成としては、「Ⅰ 序」、「Ⅱ 国際戦略提携の選択に関する研究」、「Ⅲ FCとM&Aの選択に対するTC理論からの接近可能性」、「Ⅳ 再度の理論的究明」、「Ⅴ 諸理論の類別化」、「Ⅵ 今後の課題」となっている。

「Ⅰ 序」では、多国籍企業の市場参入方式として、当初は、輸出やライセンスとの対比の中で対外直接投資の選択が研究されてきたが、その後、国際戦略提携の選択を扱う研究が増えてきたことを指摘している。また、国際戦略提携としては、国際合併事業だけでなくM&Aやフランチャイジングに関する研究も行われてきたことを指摘している。

「Ⅱ 国際戦略提携の選択に関する研究」では、藤澤氏の従来の国際戦略提携の研究成果が

整理されており、取引コスト理論に資源ベースト・ビュー、情報コスト&コミュニケーションコスト、製品・製法アーキテクチャー論を加味しながら、国際戦略提携としての国際合併事業とOEMとの選択原理を包括的に論じている。

「Ⅲ FCとM&Aの選択に対するTC理論からの接近可能性」では、取引コスト理論から海外フランチャイジングおよび国際M&Aを考察したBuckley & Strange (2012)などを紹介しながら、フランチャイジングやM&Aの選択は、取引コスト理論だけでは説明が付かないことや、取引コスト理論に加えてプリンシパル・エージェンシー理論やダイナミック・ケイパビリティ論も必要になることを指摘している。

「Ⅳ 再度の理論的究明」では、フランチャイジングやM&Aの選択原理として、取引コスト理論に対してプリンシパル・エージェンシー理論やダイナミック・ケイパビリティ論を理論的に統合することの可能性について論じている。また、「Ⅴ 諸理論の類別化」では、知識移転の特徴によって類型化を行いながら、どの理論がどのような状況で特に当てはまるかについて論じている。

本論文は、取引コスト理論、プリンシパル・エージェンシー理論、ダイナミック・ケイパビリティ論などの諸理論を包括的かつ体系的に統合し、多国籍企業の外国市場参入戦略に関する一般理論を構築するといった高度な目標に向けての考察であり、刺激的で興味深い内容である。ただし、現実の多国籍企業の外国市場参入

戦略は、当初は M&A を通じた国際合併事業で、その後に完全所有子会社に移行したり、あるいは当初は現地企業に対するストレート・フランチャイジングで、その後に現地企業との国際合併事業型フランチャイジングに移行するなど、非常に複雑な側面が多い。一般理論で現実の多国籍企業の複雑な動向をどこまで説明することが可能であるのか、評者も改めて検討してみたい。

（大阪市立大学商学部教授 鈴木洋太郎）